

図画工作科・美術科教育研究（Ⅱ）

—— コンクールの問題点とコンクール特選作品に対する子どもの眼差しに関する調査 ——

初田 隆 福本 謹一
(兵庫教育大学) (兵庫教育大学)

前回の図画工作科・美術科教育研究(I)の調査においてコンクールへの応募に向けた指導とその成果を外発的な心理的報酬(リワード)として受けとめる学習者の傾向などが考察された。それを受けて本研究では、まず、美術教育を側面的に反映してきた児童画コンクールの中で大正期から全国的規模で展開されてきた全国教育美術展の歴史的経緯とそこで浮かび上がってきた児童画コンクールの問題点を整理した。次に全国教育美術展の特選作品を評価鑑賞の刺激対象とした時、コンクール入選作品という事実認識が子どもの絵に対する嗜好や認知に影響を及ぼすかどうかを検証するために、アンケート調査を行った。コンクールの問題点としては、モチーフの設定や技術指導に見られる教師主導の問題が継続的な課題であること、地域性や個性の希薄化が見られること、新しい実験的表現が必ずしも子どもの欲求に見合っていないことなどが明らかになった。また、アンケート調査の結果、刺激対象となったコンクール特選作品についてあらかじめ特選であることを告げられた調査群の子どもは全般に評価が甘くなる傾向があることが明らかになった。また、児童の作品評価の枠組みは主に表現技術についての承認度、イメージ(内容)への共感度、自己参入の度合いという3つを基軸に成りたっていること、全国教育美術展の典型的な傾向を示す作品や実験的な作品を必ずしも評価せず、むしろ大衆文化の影響の強い作品に惹かれることなどがわかった。

キーワード：教科性・美術教育・図画工作・描画指導・児童画コンクール

初田 隆：兵庫教育大学・実技教育研究指導センター，〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米 942-1

福本謹一：兵庫教育大学・芸術系教育講座，〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米 942-1

Study on Art Education at the Elementary and Secondary School Level (II): Problems of Child Art Contest

Takashi Hatsuta and Kinichi Fukumoto
(*Hyogo University of Teacher Education*)

Pros and cons of the child art contest have been the critical issues on the instruction of art, specially in painting. While the development of teacher's consciousness of teaching art and children's painting skills were observed, several of the uninvited outcomes have been indicated such as the extraordinary emphasis on the skills and methods of studio production, the similarity of painting styles, and the loss of uniqueness both of individual and local quality.

The purpose of this study was to recollect the issues on art contest and inquire into the influences on the children's recognition of art products by the peer group.

The research was designed to use quantitative method to find the influences of the notification of the contest award-winning ones on the children. The two classes at three grades of the second, fourth, and sixth were selected for the control and comparison group. One class with the notification of the award winning art, another without notification but just as a collection of the art by the peer from the different regions. As the stimulus, a set of fifteen award-winning paintings were shown to the two groups of each grade and asked to respond to the questionnaires provided.

Findings indicated that children are inclined to respond more affectively to the art products with recognition of the award-given works than the children without notification. Contest award may affect on the children's evaluation or critical stance as a hollow effect in a way and make children ponder more on the art done by the peer group.

Key Words : subject, art education, art and crafts, drawing practice, Children's Art Competition

Takashi Hatsuta is an Associate Professor of Center for Practical Education, Research, and Training, Hyogo University of Teacher Education, Shimokume, Yashiro-cho, Hyogo 673-14

Kinichi Fukumoto is an Associate Professor of Department of Art Education, Hyogo University of Teacher Education, Shimokume, Yashiro-cho, Hyogo 673-14

1. はじめに

前回の「図画工作科・美術科教育研究(I)」の調査において図画工作科・美術科の教科の実態と問題点の一つとして従来から指摘されてきたことではあるが、(1) 指導の実態として描画指導(技術指導)に偏りのあること、(2) コンクールへの応募に向けた指導とその成果を外発的な心理的報酬(リワード)として受けとめる学習者の傾向などが考察されたが、¹⁾ 今回、それを受けてコンクールに関連する調査研究を行うことにした。

美術教育においてコンクールと言えば、児童画コンクールを指し、それがデザイン・コンペや児童彫刻展といった形態を想起するものでないことはいわば当然のことと受け取られている。そして児童画コンクールが話題にされる際、その功罪が問題になる。そのメリットとしては、指導者の指導の改善につながる、児童画の水準を高めること、子どもの自己の作品の客観視につながるなどが挙げられているが、むしろデメリットとして、コンクールに入選した作品と典型的な作品を再生産すること、技術指導偏重によって子ども独自の表現につながりにくいことなどが従来から問題視されてきた。²⁾

この児童画コンクールを巡る問題点を再考するにあたっては、以下のような課題意識をもった。

児童画コンクールはどういった経緯で定着してきたのか、功罪の見方に変化はないのだろうか、問題点は解決されてきたのだろうか。また、教師にとっての児童画コンクールに対する意識もさることながら、心理的報酬に結びつきやすいコンクールが現実に子どもにとってどの程度影響力をもつのだろうか。児童画コンクールで入選した作品、すなわち大人(審査員)の評価視点を通過して一定の評価を得た同時期の子どもの作品を「見る」際、子どもの「まなざし」は異なっているのではないだろうか。異なっているとすればどう違うのであろうか。

そこで、本研究では、まず、美術教育を側面的に反映してきた児童画コンクールの中で大正期から全国的規模で展開されてきた全国教育美術展の歴史的経緯とそこで浮かび上がってきた児童画コンクールの問題点を整理することにした。次に全国教育美術展の特選作品を評価鑑賞の刺激対象とした時、コンクール入選作品という事実認識が子どもの絵に対する嗜好や認知に影響を及ぼすかどうかを検証するために、アンケート調査を行うことにした。

2. 児童画コンクールの諸問題

「児童画コンクール」の淵源をたどることは困難であるかもしれないが、教育美術振興会が1922(大正11年)に開催した「全国図画展」をその先駆けとみなしてよいであろう。この時期は、山本鼎の自由画運動が最盛期に

あったことやクレパスが発明されたこととも関連を見出すことができる。この全国規模の展覧会は、「全日本図画展」として1940年(昭和15年)まで続くが、その年、紀元2600年記念事業の一環として「全日本児童クレパス画展」という名称で行われたのを最後に休止する。

戦後には、米国の占領政策に基づく教育の民主化の流れで学習指導要領が整備されつつあった時期、米国児童の絵画作品を中心とした外国児童画展が開かれ、児童画コンクールの興隆を促した。1947年(昭和22年)米国のヘレン・フリーハナンによるアメリカ児童画展、1949年(昭和24年)の東京都美術館におけるカリフォルニア州美術専門学校作品展などに啓発されて1949年に東京都児童・生徒作品中央展、日米子ども美術展が開催された。また、1950年(昭和25年)に日教組主催のアメリカへの感謝図画展などが開かれた。その後、児童画コンクールは創造美育といった民間の美術教育運動とも呼応して様々な形で開催されるようになるが、いずれもその多くが戦後に出発したものである。³⁾

こうした中で、教育美術振興会の全日本図画展は戦前から戦中にかけて9年間の休止期間を経て1949年(昭和25年)に再開され、昭和42年、NHKの「全国図画コンクール」の終了後、NHKの放送協力によって「全国教育美術展」となって現在に至っている。

毎年応募総数は15万点程にものぼり、中央学校賞として9校、地区学校賞として200校程度、個人賞には特選2000点以上、入選、佳作ともに1万点程度を数える。賞の審査は地方審査において個人賞、地区学校賞が審査決定され、これらは中央審査と独立した形で評価される。中央審査は地区の入選作品から地方審査とは別に特選を選出するが、地区の特選より格付けが上というわけではなく、特選はどちらの場合にも同等視される。

この全国教育美術展を主催する教育美術振興会や教育美術展の中央審査員によってすでに指摘されたことをふまえながら児童画コンクールの諸問題を整理しておきたい。

林健造が1993年の教育美術展の問題点の集約的なコメントを残しているが、そこで彼が示した認識は次のようなものであった。教育美術展が果たした役割として、「絵への教育の示唆や思考や方法に強い影響を与えた」一方で、「教育美術展パターンと言われる類型を生み出したこと、技術主義的な傾向を生み出したこと、色調が重く濁って汚いと指摘されてきた」点をデメリットとして認識している。⁴⁾

コンクールはそのメリットで語られる場合よりも、やはりデメリットを指摘されることが多い。林が指摘したこうした問題点は共通項としてそのまま受け入れるとしても、時代的な推移はなかったのであろうか。またこうした問題点は評価的な視点としてどう考えておけばいい

のだろうか。子どもからの視線を探る前に、1983年（昭和58年）から1993年（平成5年）にかけての30年間に、どのような審査員の作品展における作品の印象、評価観点が多たれたのか、またそれがどう変化したのかを中央審査員の所感などを分析しながら問題点の推移をおさえておきたい。

戦前から戦後にかけて初期の段階の教育美術展では、審査員は画家と美術教育者によって構成され、「絵画的効果を中心に児童画を見る立場」と「子どもの成長過程の中の表現活動として児童画を見る立場」との葛藤が続いていた実態が報告されているが、これはそのまま現在にも合い通じるところである。

戦後は一本線描の運動が展開され指導技術として評価されたがパターン化した表現につながった面もあったようである。コンクールに選出された作品の実態として「煮詰まった作品」と「外国の児童画趣味の意識的押しつけ」という形式的には対立するものでありながら、教師主導の指導過剰傾向はこの時期から見られていた。審査委員に画家が多かったことも「豆画伯」と言われる子どもを生み出す要因の一つと考えられるし、そこには子どもたちに造形性の追求を求める辞儀通り等級化につながるコンクールの土壌が垣間見えている。

昭和43年度（28回展）以降「教室の学習から生まれた子どもの創造的な作品」ということがモットーとして示され、審査上の共通理解事項（ガイドライン）の中心となったのは次の2項目であった。一つは、主体性の重視（子どもの主体的活動の重視）であり、二つ目は、類型排除（子どもの想いの率直に表れた絵、幼・小の作品における裏面の画題や表現の意図も読み、子どものメッセージを読み取ることを重視）である。⁵⁾ これによって審査が「子どもの成長過程の中の表現活動として児童画を見る立場」という表現の主体者としての子どもの成長軸や表現欲求を中心に据えたモメントに移行することを明確に打ち出した。

1983年（昭和58年）から1993年（平成5年）にかけて10年置きタイムスパンで全国教育美術展に寄せられた審査講評をまとめたものが表1であるが、これを見る限り、従来からの指導過剰といった問題や類型的表現の指摘が見いだされているし、問題点として生き続けているのである。

63年に、それまで実施されていた全国教育美術展（絵画22回）、全国教育デザイン展（5回）、全国教育版画展（1回）を総合して全国教育美術展として開催された。この時点では、絵画展を主流とした教育美術展が他の部門を統合したといっても、依然として絵画中心のコンクールであることに変化はなく、デザイン、版画が極端に少ないという実態は今日まで変わっていない。

題材の類型化、固定化傾向の指摘は過去30年間を通じ

て必ず指摘されてきたものであり、絵を描く主体者である子どもの思い、感動などの埋没という対比的なコメントとともに宿命的な様相さえ見せている。「教室の学習から生まれた子どもの創造的な作品」というモットーを掲げながら教師主導の指導という評価につながるのなぜなのであろうか。それぞれの時期に今後の課題として示された願いは似通ったものであり、宿題として残されたままである。

こうした問題点を再度整理しておくならば、次のようになるだろう。

(1) 教師主導の指導

この問題は、主題の強制化や技術技法の適合性の問題や評価視点の偏向といった問題として立ち表れてくる。

(a) 主題・モチーフの偏向

主題や題材が類型を生み出すことへの批判は児童画コンクール初期からの継続的な課題である。モチーフ的にコンクール向きと言われる偏向が見られたことは確かなようである。その一例を挙げると、観察画の領域では、動物に関しては牛、鶏、ネコ。風景に関しては神社・仏閣、人に関しては農村、漁港、工場で働く人々、鼓笛隊。人工物では消防自動車。構想画の領域では、「笠地蔵」、「ねずみのもちつき」などが指摘されている。

こうしたモチーフや題材の偏りは、子どもの思いよりも表現効果としてインパクトのあるものにつながりやすいというある種の造形的経済性が働いている。裏返せば、教師の側の絵画の造形的価値の偏向でもあり同時に、審査員の評価偏向を裏付けるものでもある。林は「汽車はデゴイチ、新幹線はダメ、ウマ・ブタよりもウシの神話を生んだ」と述べているが、このことは審査員の中に絵の評価に関するある種の規定的枠組みが暗黙の内に存在し支配的であったことを示しているのである。

(b) 指導過剰と類型性

また、技術や技法の点でも教師主導の問題は指摘されてきた。「作品主義」や「指導過剰」という指摘がなされているが、「やらせ」や「描かせた絵」という見方には主題も含めて、構図、色、塗り方などあらゆる技術・技法面に渡っての詳細な教師主導の指示が裏にあって、子どもの手をそれこそ手段として表現したような絵が依然として存在しているのである。「作品主義」という場合、その多くが塗り重ね、細密描写など「息の詰まるような」「どぶネズミ色」と形容されたりする絵を指し示すことが多いが、一方で子どもの主体性重視の動きを逆手にとった子どもらしさを装う指導過剰、もしくは指導欠如型の絵も存在する。

類型的な指導は、60年代から70年代にかけては「〇〇校」型といったように個々の学校に見られる特殊性を指すものが多かったが、70年代頃から「〇〇式」的な定形的法則的指導法の形式を指す場合も出てきた。90年代に

表1

	1963年	1973年	1983年	1993年
作品の印象	この年より、絵画、版画、デザインを統合した展覧会 大まかな表現、細密描写、描き込んだもの、余白を残した作品、大胆でタッチのもの、非常に繊細でウェットなものなどヴァリエティーに富んでいた デザイン（模様・平面構成、飾るデザイン、知らせるデザイン、絵によるデザイン）では8割が平面構成 デザイン、版画は少ない 概念的な絵が気になる ものに迫る熱っぽい態度がうかがわれる	表現材料や技法の点でバラエティーに富んでいた 題材の固定化が目立った（牛、鶏、機関車、工場、屋根、寺院） 版画、デザインが少ない 意図のはっきりしない作品が目立つ 色のついた紙に書かれたものが多い お話の絵で主調色を決めて雰囲気を出す方法が成功している 教えすぎの絵が特選 構想的な作品が少ない デザインが充実化	克明に描かれた力作ぞろい これが子どもの絵かと思われるような巧みな絵 例年通りの力作ぞろい デザインが少ない 教育現場の様々な問題が露呈している情報化時代の皮肉な背景 際だって目立つ作品が少ない（全国的にレベルが等しくなってきた） 地域の特色があつてバラエティーに富んでいる 指導者の熱意が背景となっている望ましい作品	指導色が強く、類型化固定化が多い 形骸的描法、類型的モチーフ、構図 描き込み、鈍い色彩の作品も散見 どぶネズミ色と言われるくすんだ色の絵 子どもの想いや、夢を大事にしようとする気配を感じる作品 子どもの個性が感じられる 地域の素材を取り上げた作品が多々/ 地域性の薄らぎがある 教師の指導がステレオタイプ的に現れている作品群が多く見られた 気負いすぎや教室の色が出た やらせや描かせた絵がある 新しい題材の作品が見られた 抽象的な表現や仕組みのある絵なども見られた 音楽をもとにしたコーラージュ的な作品
変化・動向		アクションペインティングのように自由なデフォルマシオン 水彩絵の具の透明性を生かしたものが多くなった 明るく伸びやかな作品が多かった	じっくり描き込んだ写生的な絵 お話の絵や空想の絵の増加 部分的・模倣的な配列の増えた構図 たくましさから優しさへの画面の表情の移行	子どもたちがしっかり表現する絵が増えた 「変わりましたね」という動向の指摘がある 子どもの発達に即した新鮮な表現、個性的な表現などの増加 前回より〇〇式という絵が減った キラキラ輝く子ども自身の表現が増えた
問題点の指摘	牛、鶏、虫、工場など題材の固定化 版画という古い概念が邪魔をして出品数が少なくなる	教師の意図通り描かせ過ぎた、ねらいすぎた作品 知的な絵、テクニックが先行して息抜きのできない作品に見る画一性 自校のカラーを脱しきれないでいる 色の濁り安い傾向がある 感情のこもった、描いた子の顔が浮かぶような楽しい作品がない 塗りすぎる傾向	指導者の意図が作品の裏に見えすぎる（指導過剰） 同じ題材、対象、描いた位置、技法、マチュエルも同じ絵（表現形式の画一化） 人物画が少ない、デザインが少ない。（題材の偏向） 表現技術が目立つ一つ一つの傾向に押しやる 地域の特色は生活感情のようなものではなく、行事や風物など描かれている対象の違い	「うますぎる絵」（指導過剰）と「へたすぎる絵」（放任）の落差がありすぎる 題材に類型が見られ、新鮮味がない子どもの発達と合わない課題、表現のねらいを絞りすぎる 新しい表現が新しい類型を生むことへの危機感 励ましや、賞賛、積極的な課題の設定、方法についての相談にのることにおけるバランス 子どもの想いの自由な表現の重視の点から新風 指導過剰の作品からの脱却には時間がかかりそう 地域題材に思ったほどの差がない 表現領域の拡がりは喜ばしいが子どもの興味が独創の喜びよりは仕掛けの機微傾きがち なぜ、余白にコンテをなすりつけるのか、なぜ絵の具のしぶきをちりばめるのか、なぜどの子どもも両足を広げて飛び箱を越える姿を正面から描いた絵なのか
審査の観点	構想画と写生画と両方にまたがるもの3つに分けて審査 個性豊かな作品 対象を的確に内面化した作品 見るものの心情に訴える作品 子どもの発想や表現を大切に 新しい実験や試みを尊重	積極的な意欲が素直に感じられる絵（力強さ、躍動的、新鮮、繊細、ユーモラス） 自主的、感動的な作品を尊重 意欲的に最後まで描いているもの 誠実な製作態度	気負いのない素直な表現 子どもの叫びの聞こえる個性の表出 主題のはっきりしているもの 造形性の陶冶が見られるもの 対象の知覚、創造的思考、追求、誠実、耐性、明朗さをフィルターに 技術が稚拙でも子どもらしい生命感にあふれた作品 形や色彩に特色のある多様な作品 新しい表現の可能性（幻想的、漫画的、抽象的なものを選んだ）	その子にあった表現の援助指導があったかどうか 素直にのびのびと斬新なアイデアで描かれているもの 自分の思いを出し切るよう指導された作品 子どもが対象を愛情をもって見つめ、心を込めて素直に表現していると思う作品
願い・今後の課題	子ども自身の生活を尊重し、発見し創造していくものを伸ばさなければならない 新しい実験を試みて欲しい	子どもの身近なところ、生活環境、自然からの取材が大切 生活全体の創造的な耕しが必要 学習指導目標の明確化、積み上げを大切に 出品作品を出品者に交換するシステムの確立を望む 審査員の構成を交代制に 表現の幅と深さを広げたい 子どもの気持ちをよく理解し、そのよさを伸ばすようにする	子ども一人一人の個性を引き出す 日常の実践の積み重ねを大事にしていく 自身を持って誠実に、素直な形と色の美しさを追求 風土に根ざした子どもらしい表現を教師と子どもで生み出すこと 発達段階に照らし子どもの感覚をひっぱりあげ、その子なりの絵であって欲しい 表現以前の問題として心の振りおこしを大切に 「本物の子どもの表現とは一体何であるのか」を絶えず問いかけること	子ども自らが主題を見つけ、楽しく表現できる提案がもっと必要 貼り絵や版画をもっと試みて欲しい 自ら描くかづくりや環境づくりを期待する 一人一人の初発の感動を大切に、描きながら想いを確かにし、個性味ある表現を期待

は「〇〇式」表現は比較的姿を潜めてきたようだが、定型化された指導方法は教師の誰でもが失敗なく絵を描かせることが可能で、子どもも達成感を味わうことができることを保証するという「ティーチャー・プルーフ」な考え方に依拠している。この「ティーチャー・プルーフ」は「セーフ・フェイル」すなわち、米国のアポロ計画で脚光を浴びた、失敗を必ず補償して間違いのない、確実安心の方法という考え方に依拠している。「どのほど未経験の教師が指導しても、失敗のない」という響きに受け取られがちである。しかし、一方で「ウォーター・プルーフ」という言葉が「防水」を意味するように、「防教師」つまり「教師の手を素通りした」という意味で、教師固有のねらいや指導上の工夫が入り込む余地を残さないということでもある。こうしたティーチャー・プルーフな指導が強調されていくと当然のことながら「チャイルド・プルーフ」として子どもまでも素通りした指導が子どもの絵に反映してしまうことになる。定型的な指導方法に対するニーズが存在することも確かだが、応募作品に表れる類型化は主題にしる、方法にしる教室の子どもたち全てに類型的な絵画観を生む危険性があるし、子どもたち個々の表現欲求や表現工夫の意欲を窒息させるという意味で問い続けられなくてはならない。子どもたちの気づきを待つ指導を優先するのか、表現工夫を先取りした支援として求めていくのか、援助する上でのバランスが問われることになる。

(2) 新しい表現・実験的表現の問題

現代美術は児童画そのものの形式にも影響を及ぼしてきたが、パスや絵の具に限らないさまざまな素材、媒体を許容し「自由な表現を促す」ものとして多様な表現が歓迎されてきている。これら多様な表現が歓迎される裏には「教育美術展型」として以前から指摘された過去の反省からカタルシス的な受け入れられ方があるのかもしれない。しかし、こうした新しい表現への試みは、63年度の教育美術展でも、板目だけを克明に描いたものや画面分割によって時間的な流れとして描いたものなどが含まれていたし、70年代には時代の流れを受けてアクション・ペインティング風のものが見られたり、それが今日では絵の中に仕掛けや、段ボールや布などをコラージュ的に利用したものとして展開されてきているのである。これらは新しい表現という名の下で、一種の流行として認められているようにも感じられる。しかし、新たな類型を生まないだろうかという危惧もあるように、子どもの本来の表現欲求に適合したものかどうかは冷静に見据えてみる必要があるし、現在の子どものそれらに対する感覚がどうであるのかにも照らし合わせる必要があらう。

(3) 地域性の問題

地域性の問題については、過去には地域的な民間教育

運動に根ざしたものの影響やイデオロギー的なものを反映したりなどしたこともあるが、地域の伝統や歴史性だけにスポットが当てられる傾向があった。そして漁村、農村で働く人々であったり、神社・仏閣というモチーフの問題とすり変わっていった部分がある。それが表現上の固定化につながったり、あるいはコンクールに通りやすく子どもを一カ所で指導しやすいという指導効率の問題とも重なってくる。「感動を表現するという造形性が、いつの間にか達成感とか成就感だけに切り替わって、道徳性とか違ったものが忍び込んでくる。その違いは、与えられた主題か、自分で見つけた主題かということだろう」6) という指摘にもあるように、地域の特殊性は子どもの個別的な心性の問題にもつながっていることを忘れてはならないだろう。

地域性には地域の特殊性を反映したモチーフや究極的には個人の個性的な表現意識が関わっているが、指導上の傾向に地域性もしくは地方性が生まれてくることもある。それには地方の審査員の傾向であるのか、より文化的な背景によるものかは明確でないものの、「〇〇県型」「〇〇園型」といった見方の中に指導上の地域的差異化が示されている。

3. 全国教育美術展特選作品についての児童の評価に関する調査

コンクールをめぐる諸問題について、「全国教育美術展」の審査委員の所感や入選作品の傾向等を分析することによって明らかにしてきた訳だが、これらはあくまでもコンクールの主催者や作品の指導者側から提起された問題であり、児童サイドの価値観や意識を必ずしも反映したものではない。例えば、教育美術展の典型的なスタイルであるよく描き込まれた神社や仏閣、牛などの作品が子どもの眼にはどう映るのか、新しい傾向の作品に対して子どもは本当にそれらを表現欲求に沿ったものとして受け入れているのだろうか、等といった事柄について明らかにしていく必要性が浮かび上がってきた。また、倉田三郎は「小学校児童たちは一般的には、自分の作品がコンクールに出品されていることをおそらく大して気にもとめていないだろう」7) として、コンクールが一概に射幸心をあおるとは認識していなかった。むしろ、教師がコンクールの結果主義を増長させるものであると述べているが、コンクールが児童の価値観や意欲、眼差しの形成に実際どのような影響を与えているのかといった問題についても明らかにしておく必要があるだろう。

そこで、「全国教育美術展(第54回展)」の特選作品45点を借用し、これらを児童がどのように評価するのか、そしてそれはコンクールをめぐる児童画の諸問題とどのように関わるのか、またコンクールの特選作品であるという事実が児童の価値判断にどのような影響を及ぼすの

かを調査することにした。

3.1. 調査の方法

調査の方法は次のとおりである。

調査対象学年2, 4, 6年, 各2学級。調査群(クラスA)にはあらかじめ作品がコンクール特選作品であることを告げておき, 比較群(クラスB)にはそのことを告げずに質問紙に答えさせる。作品点数は各学年15点づつ。調査項目は次の通りである。

- 項目1: 好感度(この作品は好きですか)。
- 項目2: 評価(この作品はすぐれていると思いますか)。
- 項目3: 造形的共感度(こんな絵をかいてみたいと思いますか)。
- 項目4: 造形性(色)評価(この作品の色をどう思いますか)。
- 項目5: 造形性(形態)評価(かかれているものの形についてどう思いますか)。
- 項目6: 造形性(構図)評価(かかれているものの大きさやいちについてどう思いますか)。
- 項目7: 内容評価(かかれているものや, 絵の中のせかいについてどう思いますか)。

それぞれの項目について5段階の尺度上に○印を記入させる。また、「とくに気に入った作品」を3点選出させ, その内1点については感想の記述を求めた。最後に, コンクールについての問いを以下のように3問設定した。コンクール出品の有無(これまでに, 先生から, 絵やポスターのコンクールに作品を出すと知らされたことはありますか), 受賞経験(これまでに, 絵やポスターのコンクールで賞をもらったことはありますか), コンクール受賞経験の効果(コンクールで賞をもらったら, もっとがんばろうという気になると思いますか)。

尚, 本調査は兵庫教育大学附属小学校に依頼した。

3.2. 調査の結果

調査の結果は次のようにまとめた。

調査項目1から7については, 各項目, 各評価段階ごとに解答数を回答総数に対する割合で表し, 折れ線グラフにまとめた(表2~表4)。X軸には, 評定尺度5段階を示し(1が高い評定), Z軸には7項目の検査群(Aクラス), 比較群(Bクラス)の結果を交互にS1~S14として示した。それぞれの作品については, 色彩, 形態, 構図といった, 調査項目と対応する観点で特徴をまとめ, タイトルや素材と共に表示した。(表5~7) また, 作品の写真はグラフと対応させた(図1~図3)。

「とくに気に入った作品」は表8に, 最も気に入った作品の感想は表9にまとめた。コンクールについての問いは表10である。

3.3. 児童による作品評価の枠組み

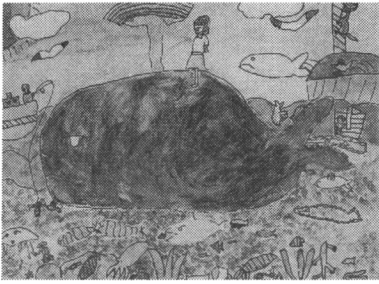
「とくに気に入った作品」で, 上位に等級付けられたものは, 折れ線グラフでも比較的安定したラインの形状を示しており(ただし4年の作品1はライン形状の乱れが目立つ), 児童の考える良い作品のイメージに近いものであると判断できる。2年は作品10, 1, 7, 4年は作品4, 1, 12, 6年では作品13, 6, 12の好感度が高い。いずれも主題が明確で, 際立った特徴を持つ作品である。

児童の感想から拾うと, 「本物そっくり」, 「リアル」, 「上手」といった写実性や「細かいところまで良く描けている」, 「色使いがていねい」などの技術的な高さを認める文言が目立つ一方, 「楽しい」, 「かわいい」, 「夢のなかの世界にいる感じ」などと, イメージの良さに着目した文言も多数みられることから, 児童の作品評価には, 表現技術に対する承認度とイメージ(内容)への共感度といった2つの側面が関わっていると考えられよう。

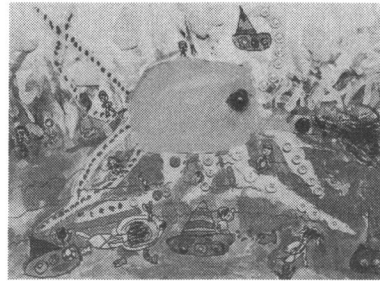
2年生の作品7は, 他の乗り物の絵(4, 14)と比べると明らかなように, この期の標準的な形態把握をかなり上回っており, 折れ線グラフのポイントも高い。しかし, 児童の評価の文言としては「うまい(上手)」と「色が良い」という2種類のみしか挙がっていない。主題が明確で描写力もかなり高いことから「とくに気に入った作品」のなかには選ばれてはいるが, 内容的には児童の心情にさほど響かなかつたものと判断できる。一方, 作品10は彩色の緻密さが目を引くが, 「やさしい」「かいた人のことがわかる」「独創的」などという評価言がみられるように, 技術面だけではなくイメージ(内容)の良さが多数の支持を得ている。児童は, 必ずしも技術のすぐれたものに無条件で高い評価を与えるというわけではなく, イメージ(内容)面で共感が得られるということを重視しているものと考えられる。4年でも作品15や5のように技術的に優れてはいるが, 内容的に魅力の乏しい作品は評価が低い。6年でも, 作品2, 7, 15などは写実的に良く描き込まれた作品であり, 児童の評価は低くはないものの, 6や13などの空想的なイメージ作品と比較すると, 好感度はかなり落ちるのである。

また, 「自分にはかけない」というように自分と比較したり, 「わたしは海が好きだから」「わたしは動物が好きだから」などと自分の嗜好を評価の窓口としたり, 「(作者と)わたしは気が合いそう」など作者と自分を結びつけたりといった文言が挙げられていることから, 作品をみる際にそれぞれ児童固有の自己参入が行なわれていることがわかる。児童による作品評価の枠組みは, 主に表現技術についての承認度, イメージ(内容)への共感度, 自己参入の度合いという3つを基軸に成り立っており, 主題の明確さ(構図・構成), 色や形の明解さ(造形要素), 創意工夫等が具体的な観点として位置付けられよう。

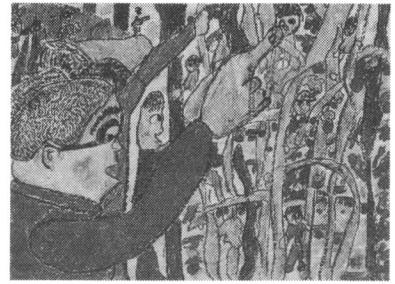
2年



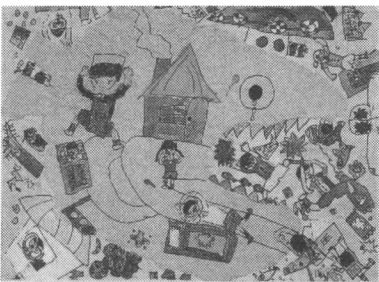
作品1 群馬県



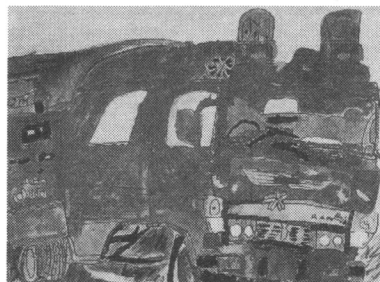
作品6 静岡県



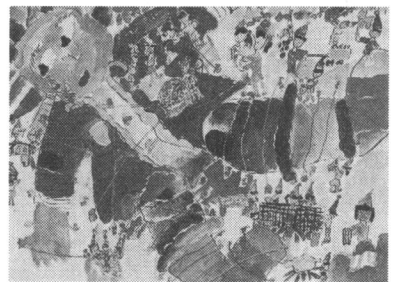
作品11 愛知県



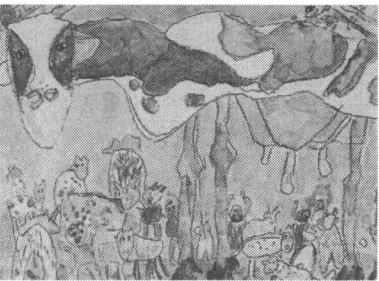
作品2 和歌山県



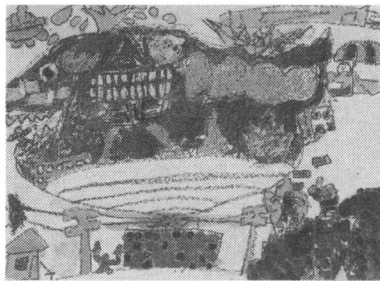
作品7 富山県



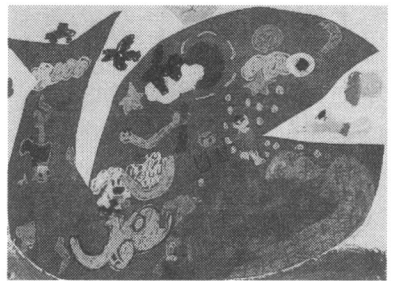
作品12 愛媛県



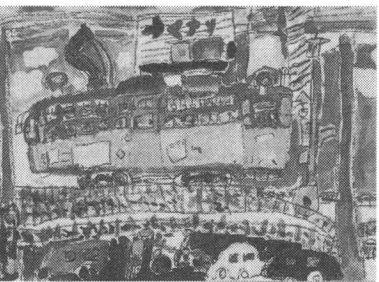
作品3 宮城県



作品8 山形県



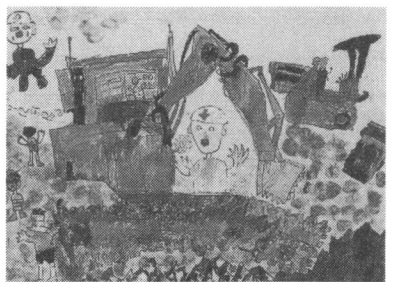
作品13 岐阜県



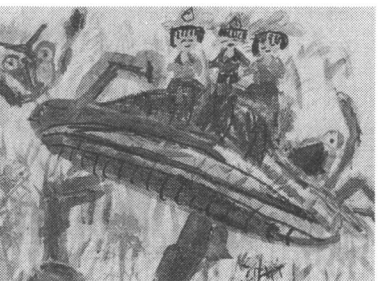
作品4 愛媛県



作品9 京都府



作品14 京都府



作品5 兵庫県



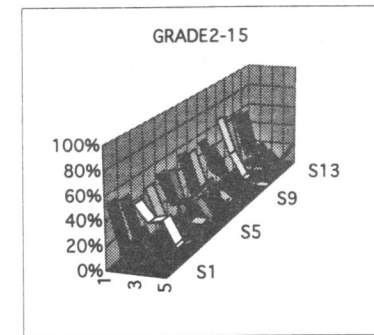
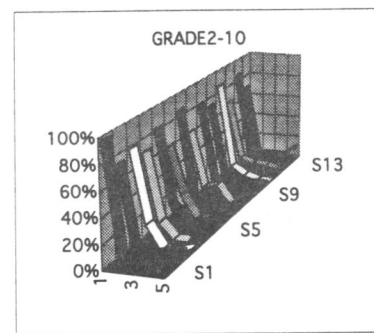
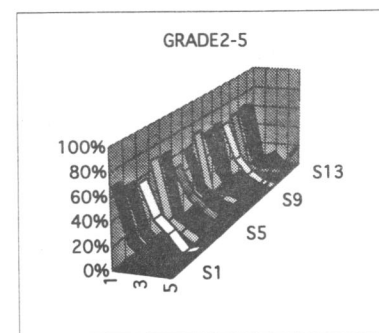
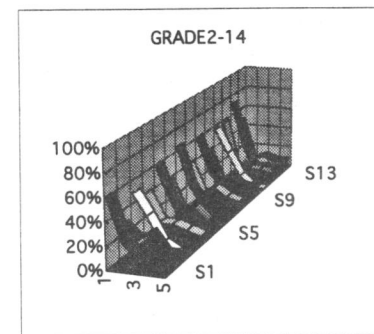
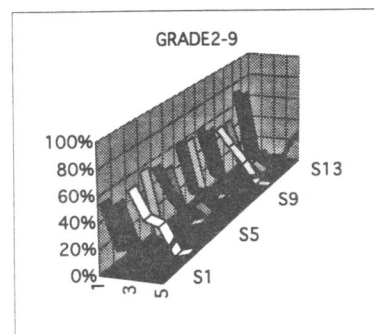
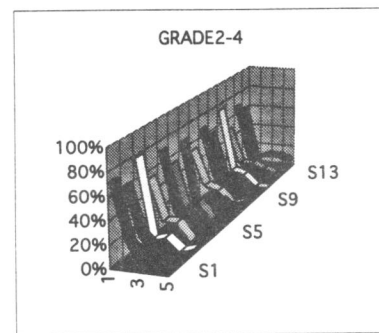
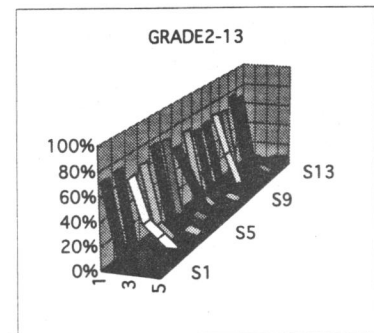
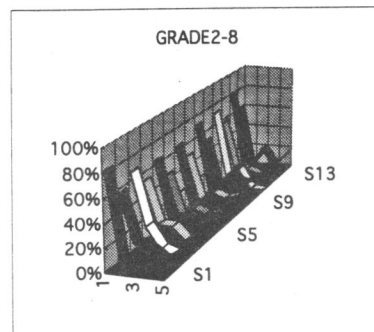
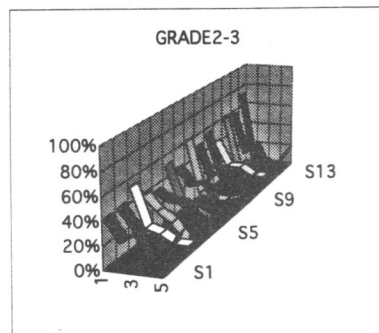
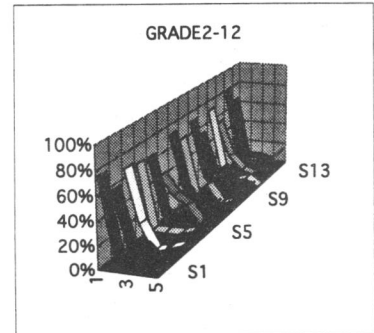
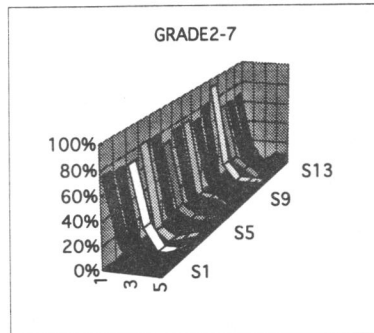
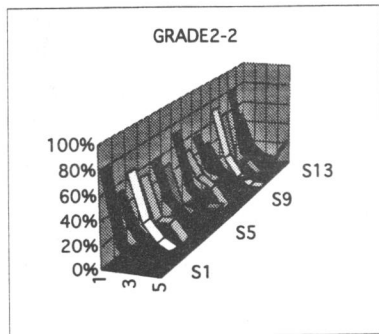
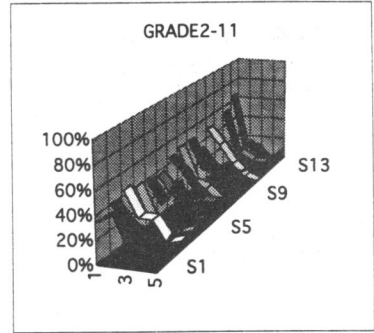
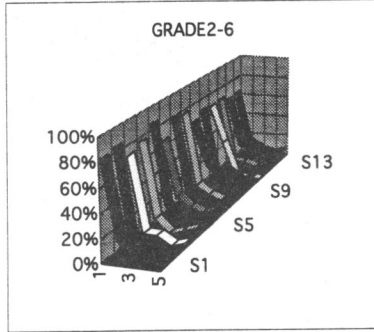
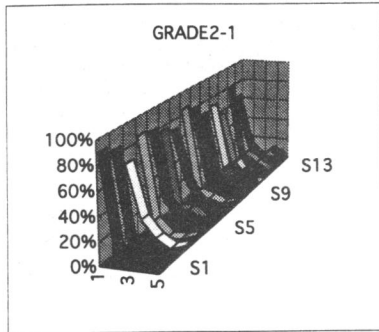
作品10 秋田県



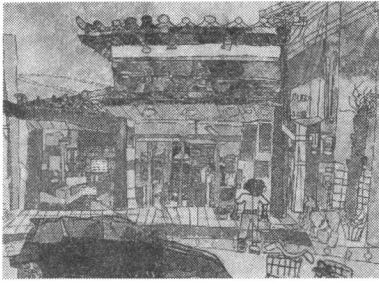
作品15 愛媛県

図1

表2 2年生総合グラフ



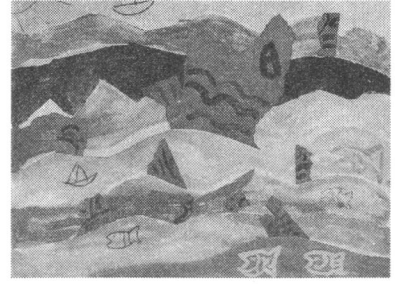
4年



作品1 新潟県



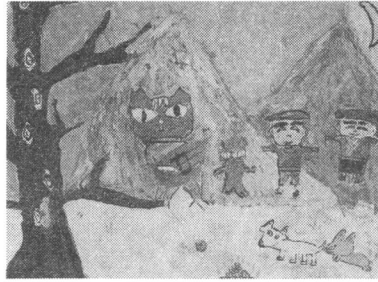
作品6 京都府



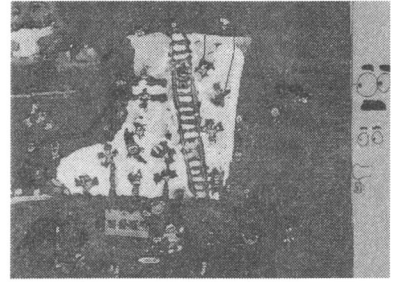
作品11 東京都



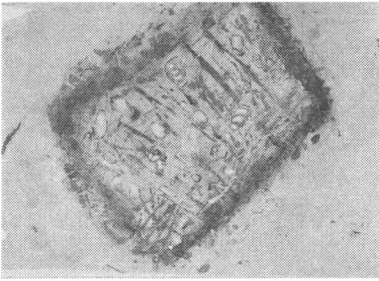
作品2 栃木県



作品7 静岡県



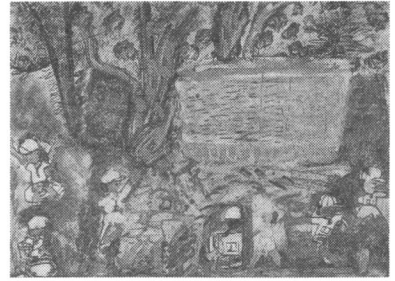
作品12 福島県



作品3 島根県



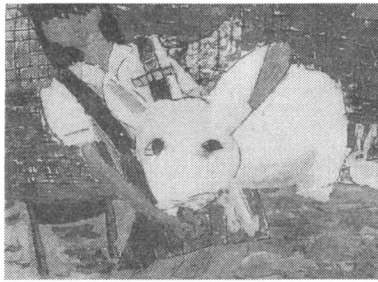
作品8 徳島県



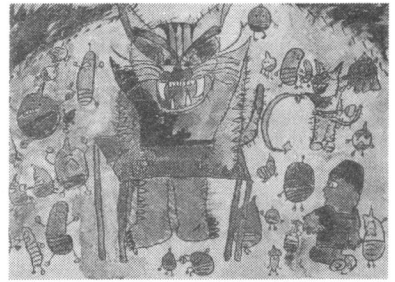
作品13 鹿児島県



作品4 香川県



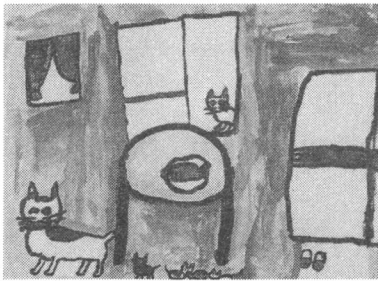
作品9 神戸市



作品14 岐阜県



作品5 福島県



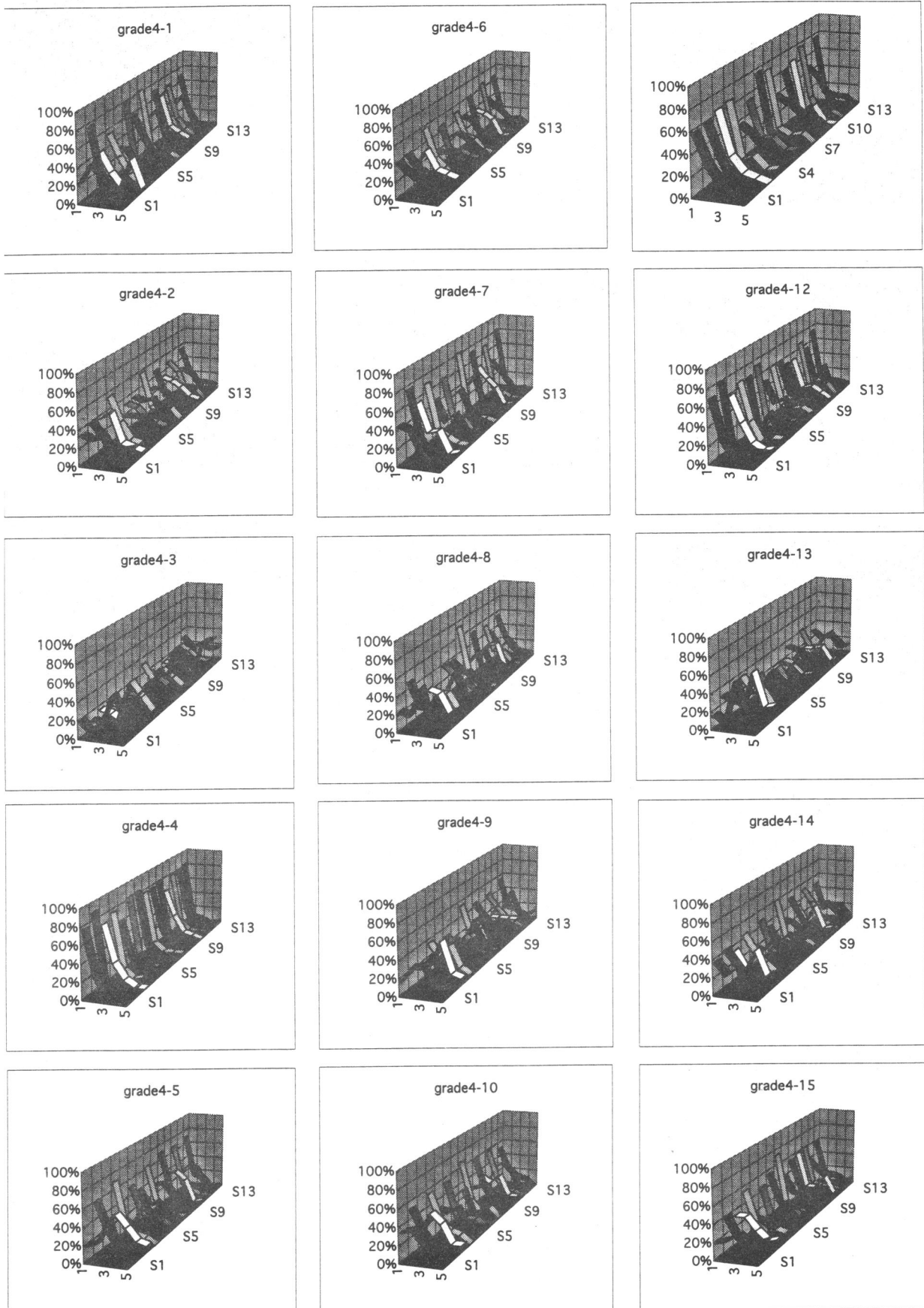
作品10 東京都



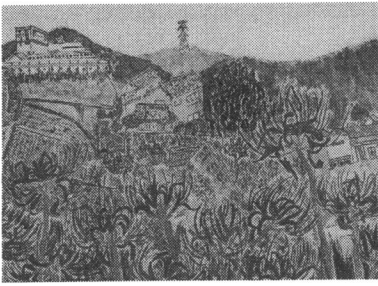
作品15 愛媛県

図2

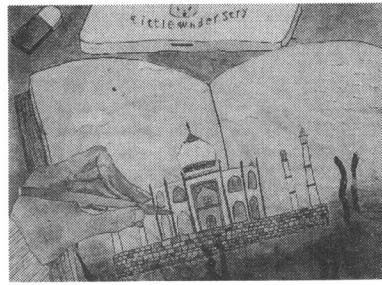
表3 4年生総合グラフ



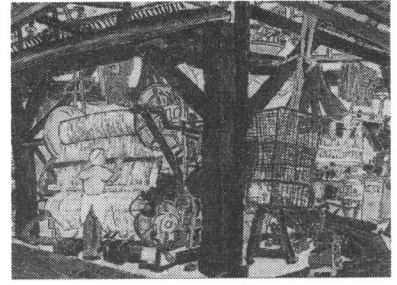
6年



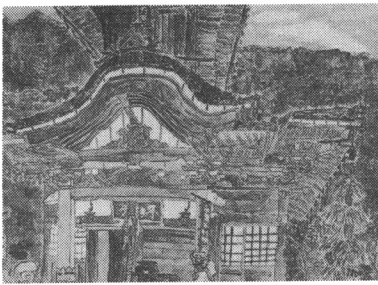
作品1 広島県



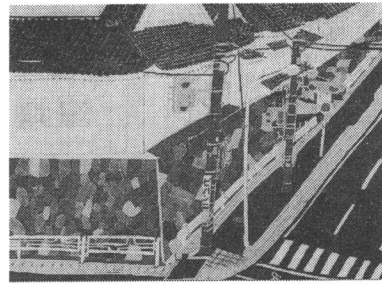
作品6 和歌山県



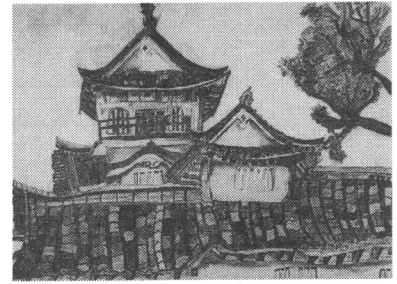
作品11 愛媛県



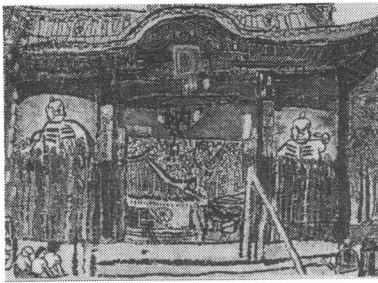
作品2 京都府



作品7 新潟県



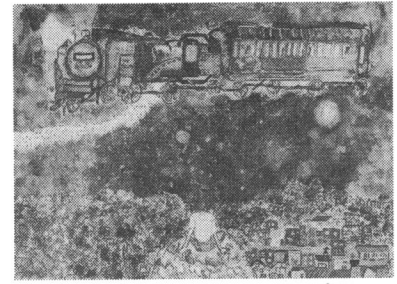
作品12 富山県



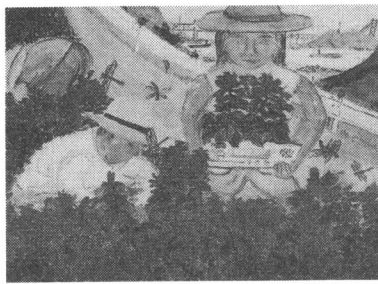
作品3 愛媛県



作品8 石川県



作品13 富山県



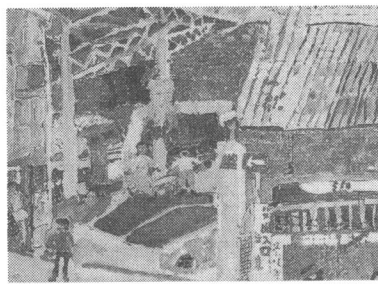
作品4 香川県



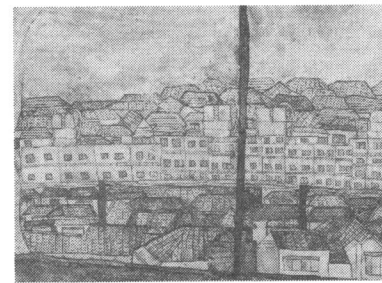
作品9 大阪府



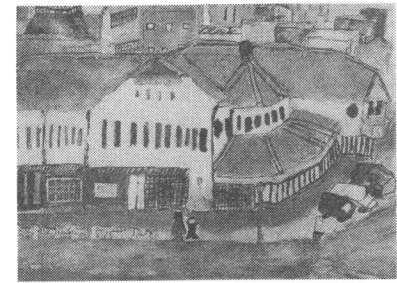
作品14 愛媛県



作品5 神戸市



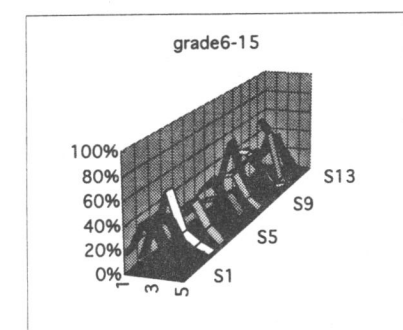
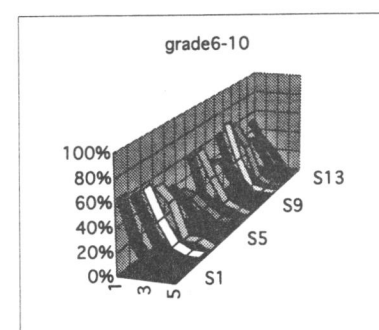
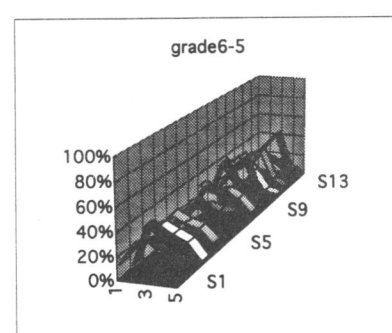
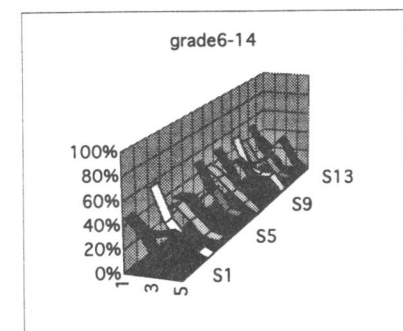
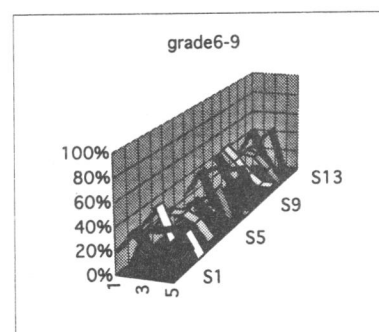
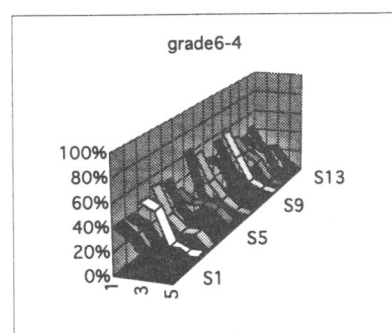
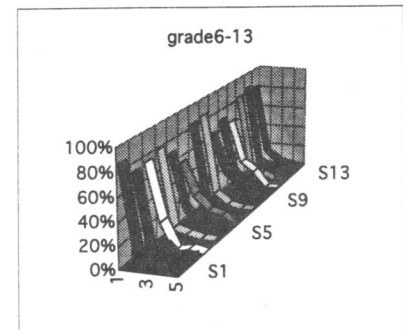
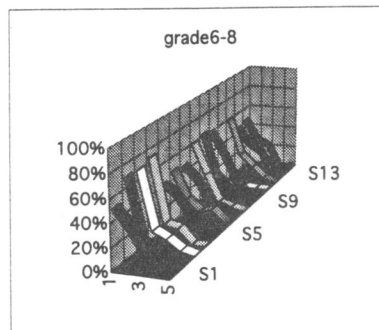
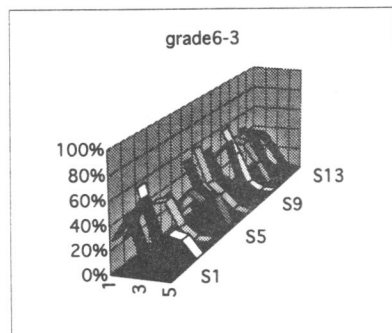
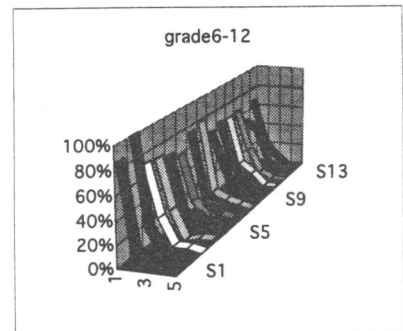
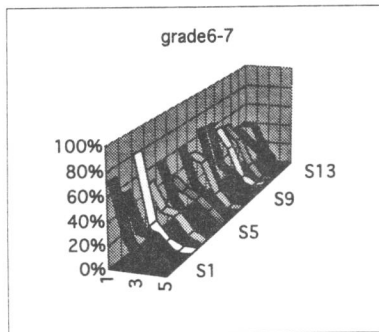
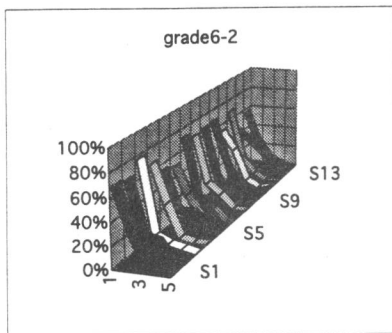
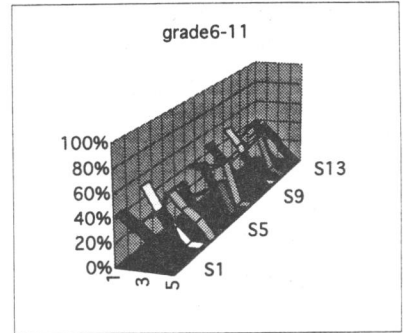
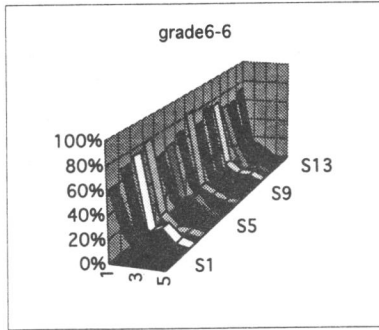
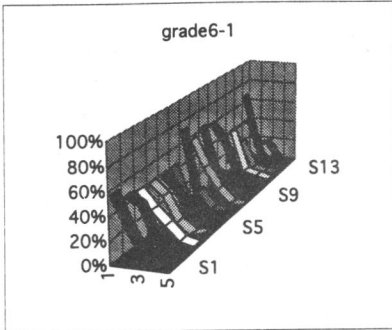
作品10 新潟県



作品15 島根県

図3

表4 6年生総合グラフ



3.4. コンクールをめぐる諸問題と児童による作品評価

前述したように、全国教育美術展は、「教室の作品から」というキャッチフレーズのもとに、児童画の飾りけのない諸相を公開してきたはずだが、コンクールという性格上、技術の高さが競われ、入賞作品のエピゴーネンを再生産するという状況を、または子どもらしさが誇張された作画的な作品の輩出といった事態も一方では生み出してきた。そしてそのことは審査委員相互の討議で繰り返し反省され、打開の方向が模索されてきた。特選作品にはそういったコンクールをめぐる審査委員の葛藤が反映されている。典型的なコンクール作品、子どもらしさが強調された作品、実験的な作品、地域性が際立った作品、児童の個性が強く表れている作品など多様な作品傾向を選出し、今日の美術教育の状況をできるだけ公平に浮き彫りにしようという配慮がうかがえる。本調査で使用した作品もそれぞれに特徴があり、全国教育美術展の問題点が集約されていると思われる。

神社や仏閣、ブルドーザーやトラック、牛やウサギ、働く人など、以前より決まって一定数の特選作品を産み出す題材がある。これらの題材にふさわしい描法、色使い、構図などが重なりあって典型的なスタイルが形成されてきている。2年では作品4, 7, 13が乗り物, 3, 5, 10, 15が生き物, 9, 11が人物であるが、7と10以外は好感度、各項目のポイント共に低い。7や10のように技術やイメージが秀でていない限り、写生を中心にした作品では2年生児童の共感を得ることができないことがわかる。現代の児童の生活感覚に乗り物や生き物、友達などといった題材はもはやすぐわかないものとなっているのではないだろうか。逆に構想画は好感度が高く、とくに作品1, 2, 13のように主題が明確でカタログ的な構成になっており、イラスト風の「かわいい」表情や形態で描かれた作品については評価が高い。42回展で針生一朗が「大衆文化に浸透された感性の中から、新しい表現の方向を見出す可能性はないのか」⁸⁾と問い掛けているが、今日少なくとも児童の作品評価の枠組みには「大衆文化に浸透された感性」を見出すことができる。

そういった意味で、4年の作品には実験的なものや漫画風のものなどが含まれており興味深い。作品3は布にドローイング、作品13はアクション・ペインティング風の絵の具の塗りこみが特徴的で、いずれも、題材としては一定の新鮮味があり指導者の意識がうかがえるものだが、児童の評価は極めて低い。実験的な作品が必ずしも児童の評価に結びつくものではないことが分かる。制作過程における児童の取り組みの良さは推察できるのだが、結果としての作品がコンクールに出品され他者の評価を得るということには馴染みにくい作品であるとも言える。児童が価値を認めにくい作品に賞を与えることの意味は十分検討されねばならないだろう。一方、作品10, 11も

実験的な傾向を示すものであるが、特選作品としては素朴で物足りない感じがするものの、いずれも「とくに気に入った作品」に一定数選ばれており、作品10は「シンプルで猫がかわいい」ところや「涼しい色」、作品11は「魚が動かせるところ」などが認められている。4年でも、作品15や5, 6などの技術的にはかなり高い水準を持っている写生作品（生活画）よりも、作品12や4のイラスト風の構想画が高い支持を得ている。

6年生ともなると写実的な表現に対する承認度が高まってくるので、写実的に的確に描かれた作品に対しては評価が高く、逆に作品空間が歪んでいたり形態に無理な変形がみられたりする場合は評価が低くなっている。作品5, 9, 15の評価は極めて低い。大人の目からは作品に努力の後が伺えるし、さほど手慣れていない形態描写や空間の処理に素朴な好感を持つことができる。とくに作品15は執拗に描き込まれた作品のなかでは色調や筆使いの素朴さが異彩を放っていると思われる。表現技術の高さではなく、作品と関わる態度や個性、その子なりのよさを重視しようという指導者や審査委員の意図、教育的、審査上の意義は重要であるが、そのことが児童に受け入れられるような状況が形成されていないこと自体が美術教育の大きな問題であると言えよう。

コンクールをめぐる諸問題とはパラレルに、児童による作品評価は一定の方向性を示しているように思われる。これまでに全国教育美術展が産み出してきた児童画の典型的なスタイル、つまり神社や仏閣、牛や働く人などという生活の場から生起するテーマ、執拗に描き込まれた空間、やや彩度の低い波目の色調などに対し、空想的で夢のあるテーマ、かわいく楽しい空間、イラスト風の描写、明るくさわやかな色調等を児童は求めている。また、個性的・実験的な作品や子どもらしさが強調された作品、教師の指導過剰が見て取れる作品など、どのような作品であっても児童は自分にとって面白くない作品は拒絶し、心情に響く作品は評価しているのである。このような児童の眼差しをコンクール審査に反映させていくことも必要であろう。

3.5. コンクールの影響

本章では、児童による作品評価の枠組みや、傾向について述べてきた。特に前項では、コンクールの特選作品であっても児童は一定の基準で作品評価を行なっていることに言及した。とはいえ、本調査にあたりあらかじめコンクールの特選作品であることを告げたクラスと、そうでないクラスとでは、やや異なった評価傾向を示している。

調査に先立って、①コンクール特選作品であることを告げたクラス（クラスAとする）では、審査委員の評価に引き寄せられて、そうでないクラス（クラスBとする）

に比べ評価基準が甘くなる、②クラスAでは、すでにある基準を通過してきた作品を更に評価するということで評価基準を上げる、つまり評価が厳しくなるという2通りの予想を立てた。結果は、2年、6年ではおおむね①の傾向、4年では②の傾向が確認された。4年はギャングエイジの後期にあたり批判的な言動が目立つ学年でもあり、②の傾向が強調されたものと考えられる。また、クラスBもグラフのライン形状は乱れているものが多く、2、6年のラインと比べると全般に評価基準が低い上、評価が突出した作品が少ない。9才・10才の壁といわれるように世界観や認識の在り方が急速に転換していく年代でもあるので、作品の評価についても価値決定の保留や極端な判断、多様な指向性等がみられるものと思われる。

②の傾向が端的にでている作品は、4年では作品1、5、7、8、10、11、15等である。作品10、11は「とくに気に入った作品」の得票に大きく差がでている。とくに作品7、8、10、11は技術的にやや稚拙さを感じさせるので、コンクール特選作品としてふさわしくないとの反発からクラスAの評価が厳しくなったものと思われる。作品11で設問1(好感度)はABともに変わらないのだが、造形要素の設問になるとクラスAの評価が低くなっていることからわかる。また、クラスAではグラフ上の評価が作品7や11よりもかなり低い作品1が「とくに気に入った作品」の2位に選ばれている。このことから作品7や11がコンクール特選作品としてはふさわしくないとの判断が働き、無難な作品1が選ばれたものと推察できる。尚、作品5、15は写実的に優れた面を持った作品であるが題材に魅力が乏しく低い評価に繋がったものと思われる。

4年に②の傾向がやや強く出現した理由として4年という学年の特殊性を先に述べたが、選出作品に問題を含んだ個性的なものが多かったことも付け加えておきたい。尚、①、②の反応は、ともに審査基準への問い返しとしては表裏一体のものであると考えられる。「コンクール作品だからすごい」と「コンクール作品の割には大したことがない」という2つの評価に共通しているのは審査基準への暗黙裡の追従であることを忘れてはならない

表9

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
2年	A	13	4	1	6	0	3	14	2	0	2	2	1	1	5	1	2
	B	14	2	3	3	4	8	11	3	1	15	0	0	8	0	3	
	計	27	6	4	9	4	11	25	5	1	37	1	1	13	1	5	
4年	A	15	1	0	2	3	0	0	9	1	0	2	9	14	1	3	6
	B	12	4	0	1	9	5	0	10	1	3	14	10	10	0	4	3
	計	27	5	0	4	2	5	0	19	2	3	16	19	24	1	7	9
6年	A	7	7	2	4	0	18	11	6	1	1	4	15	20	3	0	0
	B	5	4	2	1	0	19	5	9	0	13	1	13	23	1	0	0
	計	12	11	4	5	0	37	16	14	1	14	5	28	43	5	0	0

※A——コンクール作品であることを伝えたクラス
 ※B——コンクール作品であることを伝えていないクラス

だろう。

また、調査用紙の最後に「コンクールで賞をもらったらもっと頑張ろうという気になるとは思いますか」という問いを設定したが、結果は表10の通りである。表10に挙げたように、調査対象の児童はコンクール出品(入選)の経験がかなり少なく、学校としてはコンクール出品の奨励を行っていないことがわかる。そういったコンクールをめぐる価値葛藤から比較的自由な環境で育っていても、漠然とした憧れの感情をもつということや、クラスAとBとである程度の傾向の違いが認められるということから、学校とそれを取り巻く文化的な土壌としてコンクールを受け入れやすい状況はできていることがわかる。

4. 結語

全国教育美術展は大正期より続く歴史、規模の大きさ、誌面(教育美術)を通した影響力などの点から、戦後の絵画教育を先導してきたことは事実である。とはいえ、主題・モチーフの設定や技術指導にみられる教師主導の問題、類型的な作品の産出、地域性や個性の希薄化、実験的な作品がコンクールを通過することによって新たな類型化を産み出していく危険性等の問題は依然として根強いことが明らかになった。

本稿では、そのような全国教育美術展の問題点を整理し、児童への調査(価値観や眼差し)を手がかりに考察してきたわけだが、児童の作品評価の枠組みは主に表現技術についての承認度、イメージ(内容)への共感度、自己参入の度合いという3つを基軸に成り立っていること、全国教育美術展の典型的な傾向を示す作品や実験的な作品を必ずしも評価せず、むしろ大衆文化の影響の強い作品に惹かれることなどがわかった。しかし一方で、コンクール経験の少ない調査校ではあったが、多くの児童が、漠然とした受賞への憧れをもっており、コンクール入選の事実が児童の作品評価に少なからず影響を与えるということも明らかになった。コンクールの問題には無自覚なまま、そのメリットのみを重視することによって、問題を拡大再生産していく立場が俗にいう「コンクール主義」である。教師や学校の姿勢次第で、児童のコン

表10

		(1)コンクール出品		(2)コンクール入選		(3)コンクール入選が働きになると思えるか							
		①ある	②ない	①ある	②ない	①	②	③	④	⑤			
2年	A	5	2	2	6	2	1	1	3	4	7	1	2
	B	8	1	7	5	2	0	1	8	1	1	2	2
	計	13	3	9	11	4	1	3	5	8	3	4	4
4年	A	10	1	6	4	2	2	1	4	5	2	1	4
	B	3	2	5	3	2	5	1	8	3	5	0	0
	計	13	4	1	7	4	7	3	2	8	7	1	4
6年	A	3	3	1	5	2	9	1	7	8	5	0	4
	B	0	3	1	3	2	8	1	2	5	4	4	4
	計	3	6	2	8	5	7	2	9	13	9	4	8

クール受容度が決定されていくことが予想される。今後、コンクール出品の盛んな学校で同様の調査を行なうとともに、教師の側の問題点を更に鮮明にするための調査・考察を行ない、合わせて考察していかねばならないだろう。

引用・参考文献

- 1) 福本謹一, 初田隆, 「図画工作科・美術科教育研究(I)」, 兵庫教育大学学校教育研究センター, 第9巻, 1997.
- 2) 大阪児童美術研究会, 実践に基づく図画工作科指導の理論と実際, 明治図書, 1980, p.244.
- 3) 藤沢典明, 創りだすよろこび, 造形社, 1972, pp.409-418.
- 4) 林健造, 「続教室の学習から生まれた子どもの絵とは」, 教育美術, 2月号, 1993. p.75.
- 5) 林健造, 「続教室の学習から生まれた子どもの絵とは」, 教育美術, 2月号, 1993. p.76.
- 6) 太田洋三, 「座談会 子どもの生活や地域とのかかわり」, 教育美術, 2月号, 1990. p.66.
- 7) 倉田三郎, 「子どもの作品コンクールの意味」, 教育美術, 2月号, 1963. p.10.
- 8) 針生一郎, 「中央審査員から一言」, 教育美術, 2月号, 1983. p.48.

付 記

今回の調査に当たっては、兵庫教育大学附属小学校の協力をいただいた。また、教育美術関係の資料については教育美術振興会、全国教育美術展特選資料については(株)サクラクレパスに提供していただいた。

表5

2年	タイトル	ジャンル (内容)	素材 (技法)	色・彩色	形態・線	構図・構成 その他
作品1	くじらにのって	・構想 (クジラ、人物等)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・淡彩・大きめの点を意識した筆致	・素直で楽しい表現	・主題が明確 ・カタログ的な構成
作品2	くじらのあくび	・構想 (クジラ、人物等)	・和紙・ペン ・水彩絵の具 ・コラーージュ、水彩	・和紙への染め込み ・にじみ	・イラスト風で楽しい表現・人物のユーモラスな動き	・主題が明確 ・カタログ的な構成 ・類型的
作品3	うしとあそんだよ	・生活+観察 (生き物/うし)	・水彩紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・淡彩・にじみ	・素直な表現、丁寧な観察	・大きな牛と遠景のコントラスト
作品4	電車	・生活+観察 (乗り物/電車)	・白画用紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・淡彩・にじみ	・素直な表現、丁寧な観察	・電車を大きく表現
作品5	かまきり	・観察+構想 (生き物/かまきり)	・カンパス紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・バスの重色 ・大胆な筆致・余白 ・色味はやや乏しい	・かまきりの力強い描写 ・人物は図式的	・かまきりを大きく表現
作品6	大きなタコくんが海からあらわれた	・構想 (生き物/たこ)	・白画用紙 ・ポタン・バス ・色画用紙・綿 ・ペン・絵鉛 ・コラーージュ、水彩	・大胆な筆致	・素直で楽しい表現	・ポタンの効果的な利用 ・タコと周囲のものとの大小関係がリズムカル
作品7	大きなしょうぼう車	・観察 (乗り物/消防車)	・色水彩紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・淡彩・にじみ	・丁寧な観察 ・立体の把握	・大きく表現
作品8	くじらのあくび	・構想 (クジラ、人物等)	・白画用紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・パチック ・一点による筆致	・大きな表現	・主題が明確 ・大きく表現 ・類型的
作品9	かたをくむ友だち	・観察+生活 (人物)	・白画用紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・バスの力強い重色 ・背景に淡彩	・写実的な人物の形態把握、整ったプロポジション	・人物を大きく表現 ・変化のある構図
作品10	モモちゃんをだっこした友だち	・観察+生活 (人物、うさぎ)	・色水彩紙 ・水彩絵の具 ・水彩	・絵の具の濃淡による色の変化・筆致の意識・丁寧な彩色	・整ったプロポジションや人物の動作の表現	・動きと変化に富んだ構図 ・人物配置に指導の形跡
作品11	赤くみのったよ	・観察+生活 (人物、トマト)	・白画用紙 ・バス・絵鉛 ・水彩、バス	・バスの過剰な重色 ・バスの筆致を意図した描写・淡彩	・比較的整ったプロポジション	・近景と遠景の対比
作品12	ガリバー	・構想 (人物)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・絵の具の濃淡による色の変化・筆致の意識・丁寧な彩色 ・にじみ	・のびやかな表現	・主題が明確 ・細かな情景描写 ・ガリバーの配置に工夫
作品13	くじらのあくび	・構想 (クジラ、人物等)	・白ボール紙 ・色画用紙 ・バス ・コラーージュ、バス	・力強い筆致	・イラスト風の表現 ・ユーモラスな形態	・楽しいカタログ的な構成 ・類型的
作品14	ショベルカー	・観察+生活 (乗り物、働く人)	・レザック紙 ・バス・ペン ・バス	・力強い重色 ・スタンピングを利用した土煙の表現	・素直な表現、丁寧な観察 ・人物はやや図式的	・主題が明確
作品15	にわとり	・観察+生活 (生き物/にわとり)	・白画用紙 ・バス・ペン ・水彩絵の具 ・水彩	・バスの力強い重色 ・絵の具は淡彩、にじみ ・色味はやや乏しい	・にわとりの動作やプロポジションの把握	・にわとりを大きく表現 ・類型的

表6

4年	タイトル	ジャンル (内容)	素材 (技法)	色・彩色	形態・線	構図・構成 その他
作品1	えんぴつや消しゴムがいったいのふじ屋さん	・観察+生活 (風景/建物、街角)	・カンパス紙 ・ペン ・水彩絵の具 ・水彩	・淡彩・大きめの点を意識した筆致 ・絵の具の濃淡による色の変化・明るい色調	・素直な表現、丁寧な観察 ・人物は図式的	・日常空間の親和性
作品2	「ふしぎなたけのこ」を眺んで	・構想 (人物、魚等)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・細かな点描による色の変化 ・混色	・人物は動作の強調 ・様式化	・強弱のある変化に富んだ構図 ・異なった視点の混在
作品3	まぶしのカイコさんとまゆさん	・構想+観察 (?) (生き物/カイコまゆ)	・布 ・水彩絵の具 ・水彩	・大胆な筆致 ・少ない色み	・生き物の部分は繊細な線描、周囲は乱雑	・布の材質感・通常の絵画構成を否定 ・表現の新鮮さ・地域性
作品4	天の火をぬすんだウサギ	・構想 (生き物/ウサギ等)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・にじみ、ぼかし、かすれ等の利用 ・大らかな塗り込み	・生き物の動き、動作の工夫 ・イラスト風の形態	・動きの強調された構図 ・リズム感
作品5	自転車に乗る友達	・生活+観察	・黄ボール紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・点の筆致を意図した彩色 ・低彩度 ・陰影の表現	・人物の動作、プロポジションは正確	・主題の明確さ ・クロッキー指導の痕跡
作品6	牛	・生活+観察 (生き物/牛)	・黄ボール紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・線の筆致を意図した彩色 (毛並み) ・にじみ、ぼかし ・低彩度	・大らかな形態把握	・主題の強調 ・適切な情景描写 ・地域性
作品7	ヘチマとねこ	・構想 (ねこ、人物、風景)	・黒画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・白絵の具の厚めの塗り込み・点や線を意識した筆致	・漫画風の大らかな形態 (やや図式的)	・地平線をを用いた明解な構図
作品8	大そうじの時間	・生活 (人物)	・白画用紙 ・水彩絵の具 ・水彩	・のびやかな塗り込み	・顔が正面乃至真後ろ、アンバランスなプロポジション (大らかな形態把握)	・自由な人物の配置 ・子供らしい自由な表現
作品9	レタスがすきなうさぎ	・生活+観察 (生き物/うさぎ)	・色画用紙 ・バス・絵鉛 ・水彩	・大胆な筆致 ・のびやかな塗り込み	・ややバランスを欠いた形態、大小関係	・尻の大きさを強調
作品10	ネコの親子	・構想 (?) (室内風景、猫)	・白ボール紙 ・水彩絵の具 ・水彩	・大胆な筆致 ・のびやかな塗り込み (やや乱雑) ・少ない色み	・素朴で単純、図式的な形態把握 ・太陽の表現などに強弱	・空間の意識は乏しい ・子供らしさを強調
作品11	楽しそうな魚たち	・構想 (生き物/魚)	・白画用紙 ・色画用紙 ・水彩絵の具 ・コラーージュ、水彩	・少ない色み ・大胆な筆致 ・のびやかな塗り込み (やや乱雑) ・にじみ	・素朴で単純、図式的な形態把握 ・太陽の表現などには強弱	・工夫された題材 (波に添って切り込みを入れ、当初は魚を動かすことができたと思われる)
作品12	小人になつて	・構想 (架空の風景、小人)	・色画用紙 ・ペン・絵鉛 ・コラーージュ、水彩	・濃い目の塗り込み ・おらかな彩色	・イラスト風の描かき塗り等の描写 (やや図式的)	・小人の様子を覗く人物がコラーージュされている
作品13	校庭ジャングル	・構想 (架空の風景、人物)	・白ボール紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・低彩度・絵の具のすじ込みによる偶然性 ・のびやかな筆致	・素朴な表現	・不明瞭な空間 ・技法の重視
作品14	どんぐりと山ねこ	・構想 (生き物、人物)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・にじみ、ぼかし ・淡彩 ・やや荒い筆致	・イラスト風のデフォルメ ・表情の楽しさ	・主題が明確
作品15	いちごとり	・生活+観察 (働く人)	・白画用紙 ・ペン・絵鉛 ・水彩	・絵の具の濃淡による色の変化 ・丁寧な彩色	・人物の動作を強調するデフォルメ	・迫力のある構図 ・主題が明確 ・入念な指導

表7

6年	タイトル	ジャンル(内容)	素材(技法)	色・彩色	形態・線	構図・構成・その他
作品1	彼岸花のむこうに見える久地の町	・観察+生活(風景/花、町)	・白画用紙・ペン ・水彩絵の具(水彩)	・重色・淡彩 ・大きめの点を意識した筆致	・遠景の位置関係に矛盾、歪み	・近景と遠景の重なりを強調 ・典型的
作品2	如意寺	・観察(風景/山門)	・黄ボール紙 ・水彩絵の具(水彩)	・水加減による色の濃淡 ・重色	・味わいのある歪み ・丁寧な描写	・山門の一部をカットして大きさを強調 ・類型的・地域性
作品3	浄土寺	・観察(風景/山門)	・和紙・椀刷り(水彩、水墨風の表現)	・にじみを活かした彩色 ・淡彩	・味わいのある歪み ・筆による輪郭線の強調	・大きさを強調 ・地域性
作品4	サルビアのお世話	・生活+観察(働く人)	・白画用紙 ・水彩絵の具(水彩)	・軟らかな重色部分と淡彩との対比	・人物の形態把握は素朴	・動きのある構図 ・遠景と近景の強調
作品5	バス車庫で働く人	・観察+生活(風景+働く人)	・色水彩紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・混色・低彩度 ・濃い目の塗り込み ・白絵の具の多用	・素直な形態把握 ・やや歪んだ空間	・過剰な塗り込みによる平坦な空間
作品6	海の底の小さな宮殿	・構想+観察(宮殿、手、文房具)	・白画用紙 ・ペン・椀刷り(水彩・マール・ツァッカリグ・コージュ)	・淡彩・にじみ ・重色	・宮殿や魚は形式的で単純 ・写生部分(手と文房具)は標準的	・現実の世界と絵本の中での題材世界(写生と空想)を重ねて表現 ・工夫された題材
作品7	城	・観察(風景/城、街角)	・水彩紙 ・水彩絵の具(水彩)	・混色・平塗り ・丁寧な塗り込み	・軟らかな塗り込み ・ほぼ正確な空間把握	・遠近感の強調 ・構造的
作品8	神社	・観察(風景/神社、林)	・水彩紙・ペン ・水彩絵の具(水彩)	・混色、重色 ・水加減を考えた細かな色の変化 ・整った色調	・丁寧な塗り込み ・建物には歪みが見られる	・変化のある構図
作品9	わらじをあむ友達	・生活+観察(人物)	・カンバス紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・淡彩 ・絵の具の濃淡による色の変化	・不自然な人体の形(動作の強調)	・人物を大きく表現
作品10	教室の窓から	・観察(風景/町並み)	・カンバス紙 ・水彩絵の具 ・ペン(水彩)	・淡彩・淡い色調 ・絵の具の濃淡による色の変化 ・にじみ、ぼかし	・素朴な表現 ・やや歪んだ空間	・屋根の重なり面の面白さ
作品11	酒六工場	・観察+生活(室内風景/工場・働く人)	・白画用紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・濃い目の塗り込み ・混色	・丁寧な塗り込み ・丁寧な観察	・遠近感を表す構図の工夫
作品12	富山城	・観察(風景/城)	・水彩紙 ・水彩絵の具(水彩)	・絵の具の濃淡による色の変化 ・強弱 ・ぼかし、にじみ	・素直な表現	・力強く、明解な構図 ・類型的 ・地域性
作品13	夜空を走る機関車	・構想(風景/機関車、町並み、人物)	・カンバス紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・淡彩 ・ぼかし、にじみの効果的な使用	・イラスト風の柔らかい形態把握	・主題が明確
作品14	漁船	・観察+生活(室内風景/働く人)	・白画用紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・細かな点描、線描 ・整った色調	・適切な空間表現、人物の動作	・適切な情景描写 ・執拗な追求
作品15	物産館	・観察(風景/建物)	・白画用紙 ・ペン・椀刷り(水彩)	・にじみ、ぼかし ・大胆な筆致 ・白、灰の多用	・空間の矛盾、形態の歪み(てらいのない表現)	・素朴な味わい

表8

2年	作品	コメント	
作品1 (2.7)	●とても絵がうまい(すばらしい) 4 ●色がきれい ●細かいところにかけている ●クワが大きい	●カジャやタコが工夫されている ●迫力 ●きれい ●まじそう ●すうつとして ●本当の海へ行ったみたい 2	
作品7 (2.5)	●うまい(上手) 7 ●トラックの色がよい 2		
作品10 (3.7)	●色がよい 4 ●描いた人のことがわかる ●ウサギがうまい 7 ●ウサギがきれい 3	●自分には描けない 2 ●色の組合せが本物みたい ●ウサギがうまい 3 ●うまい(上手) 9 ●人間が本物みたい ●抜本的 ●やさしい	
作品2	●工夫	●あそんでいる	
作品6	●ボタンの工夫	●いろがきれい	
作品8	●上手(形は変)		
作品13	●海が好きだから	●かっこいい ●工夫	
作品15	●まじそうところが好き		
4年	作品1 (2.7)	●絵のイメージがよい ●人が絵のなかに入ったみたい ●形や色がよい ●色があっている(建物と?) ●絵のなかに文字が入っている	●明るさがでている ●細かいところまで描いている ●本物の町、お店に見えてくる ●大きさがいい
作品4 (4.2)	●細かく描いている 3 ●動物の色や形がよい 2 ●工夫(アイデア) 2 ●明るい ●大きい ●自分で考えている	●いろいろな動物が描いてある(にぎやか) 4 ●とてもよい ●描がすこい 2 ●かわいい ●楽しい ●かっこいい ●描画の様子がよくでている 2 ●強そう	
作品12 (2.4)	●小人がいっぱいいて楽しい ●なりたいとおもったことをかいている ●本物の小人みたい 2 ●小人がいていい 1	●おもしろい ●色がきれい 2 ●細かい部分までいい 3 ●小人がかわいい 3	
作品7	●かわいくてうまい	●魚が動かせる ●深い色 ●魚がまじそう	
作品10	●シンプルで描がかわいい 3 ●深い感じ ●身近なところを絵にしている	●部屋の色が好き ●色がきれい ●描がきれい ●子がする ●深い色 ●魚の姿がよい	
6年	作品6 (3.7)	●色使いがよい 7 ●丁寧 3 ●工夫 5 ●夢のある作品 2 ●かっこいい 2	●細かいところまでよく描けている ●本の仲の宮殿ができてそう 3 ●しつとりと落ち着くような感じ ●描いた人の意図が入っている ●マールブリグやカラージュ等の工夫 5 ●わたしと気が合いそう
作品12 (2.8)	●そこに城があるみたい ●本物に見える 2 ●色がきれい 3 ●思わす見せる	●空の色がきれい 2 ●木があるのよい ●下から見上げている感じ ●細かいところまで描いてある ●迫力 2	
作品13 (4.3)	●夢の中の世界にいる感じ 4 ●色使いがよい 7 ●自分も行ってみたいと思った ●細かなところまでいい ●筆を使って色を調べる ●大きさがよい 2 ●構図がよい	●見て描くより想像力豊かな絵が好き ●想像力がある(発想がよい) 2 ●さわやか ●ハッキリしている ●少年がよい(夢見ているよう、青春を感じている) 4 ●想像力がいい(空想的) 3 ●ロマン(夢)がある 4 ●かっこいい 3 ●本物の機関車みたい	
作品1	●(遠景と近景の対比について) 3		
作品2	●音風 ●色がきれい ●本格的、立体的 ●細かいところまで描かれている 2	●色使いが本物そっくり 2 ●筆のタッチ	
作品3	●インパクト ●色、形、構図がよい		
作品7	●リアル ●立体的 ●細かいところも詳しくよくかけている 6 ●気分がいい ●本当の町の風景を思い浮べる	●色がよい 6 ●明るい	
作品8	●心が落ち着く 3 ●写真みたい ●気持ちがいい ●自分がそこにいるみたい 2		
作品10	●色がきれい ●描いているとおもしろくなる ●細かいところまで色をちゃんと塗っている		
作品14	●リアル ●迫力 ●色合		